AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　６０

発行 2017 年 12 月 5 日
日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai

山行報告　＜関東ふれあいの道、山行報告＞

―日向薬師から大山参り（神奈川16）、蓑毛の道～権現山～南平橋（神奈川15）―

鶴田泰子

「関東ふれあいの道を歩く」のテーマで神奈川県17コースのうち、今回は、⑮弘法大師と丹沢の道と⑯大山参り蓑毛の道の2コースを続けて歩く計画した. 合わせて 15km の距離を歩くのはちょっときついかな？と思ったが、モデルコースの逆をたどることとした。
実施年月日:20017, 11 月 12 日（日）
メンバー:北野、今井、大西、片野、高橋、鶴田、
下見実施年月日:20017、10 月 31 日（火）メンバー、高橋、鶴田
追加実施年月日:２００１７、12 月 2 日（土）メンバー、高橋、鶴田

11 月 12 日、参加者 6 名は小田急線伊勢原駅に 8 時 30 分に集合し、8 時 49 分発の日向薬師行のバスに乗る。バス停の売店で、やさしいおじいさんにほだされおじいさんお手製のサトイモや銀杏などを重いことも忘れて購入してしまう。またやったと大いに反省。

バス停 9 時 10 分発、西 270 度方向へ日向川を遡って見晴台に向かって急ぎ気味で歩く。浄発願寺の三重塔が川べりにそびえている。罪人の駆け込み寺で知られている奥の院と大友皇子の墓は時間の都合で割愛した。

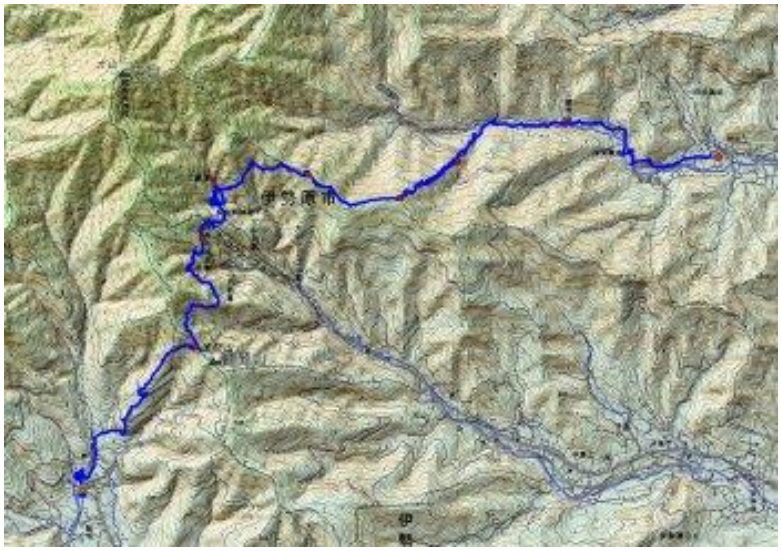
続いて石雲寺からしばらく行くと、左に急な石段道への登り口がある。10 分ほど林道をカットして、九十九曲がりの石畳の急坂で大汗かいて、大きな地蔵の立つ尾根に出た。

右の見晴台方向へ折れ，さらにひと登りすると見晴らし台に着く（11 時 5 分着）。東屋があり、ベンチに大勢の人がいて賑やかだった。ここより頂上へ行く道と別れ、もみの木の原生林の中の岩ごろのトラバース道を南西方向へ慎重に行く。紅葉シーズンのため、多くの人とすれ違い二重滝まで 30 分かかった。カメラポイントで撮影し、阿夫利神社下社に着いたのは 11 時 52 分。

下社の紅葉が見ごろだった。道は頂上へ行く階段を上らず、トラバースの道をたどり、昔栄えた大山裏参道を浅間山方向へ進む。苔むした石垣がに古色蒼然と残っていて、当時を忍ばせる心地良い道だ。浅間山手前の蓑毛越えで遅い昼食とする。（12時46分）。寒くて震えながら食事もそこそこに、蓑毛のバス停に向かって、何度も林道を横切り、急いで歩く。宝連寺に着いたのは 13 時 54 分。

左：二重の滝にて　　上：宝蓮寺にて

古びたお寺で、古い仏像がたくさん残っていて、秦野では由緒あるお寺だそうです。見学して 14 時 54 分のバスに乗って秦野へ向かう。天候に恵まれ、一生懸命歩いたので気分良い打ち上げとなりました。



残りのコースは高橋、鶴田の 2 人で下見の時に、蓑毛―小蓑毛―東小学校―光明院―名古木（ながぬき）まで歩き、12 月 2 日の午後から名古木―加茂神社―権現山―白山神社―南平橋まで歩いてきました。蓑毛から名古木までは畑の中の自動車道路や丘陵地帯の町の道路であまり良いコースではなかったが、弘法山、権現山入り口あたりからは紅葉の進んだ山に囲まれた秦野盆地の風景が素晴らしかった。権現山ののぼり口にある加茂神社は古いが鳥居も大きく立派な神社だ。弘法山と権現山の間の道の紅葉が素晴らしく毎年来てもよいと思った。展望台より箱根の山や房総の海を楽しみ、下るとすぐに古い白山神社がある、お参りをして南平橋へ向かう。道路や団地の中を延々と歩き 4 時に南平橋のバス停に到着。

連載・関東の古道　③

会所（上信国境―上野・南相木村境）その３

富永　滋

【道筋の推定】

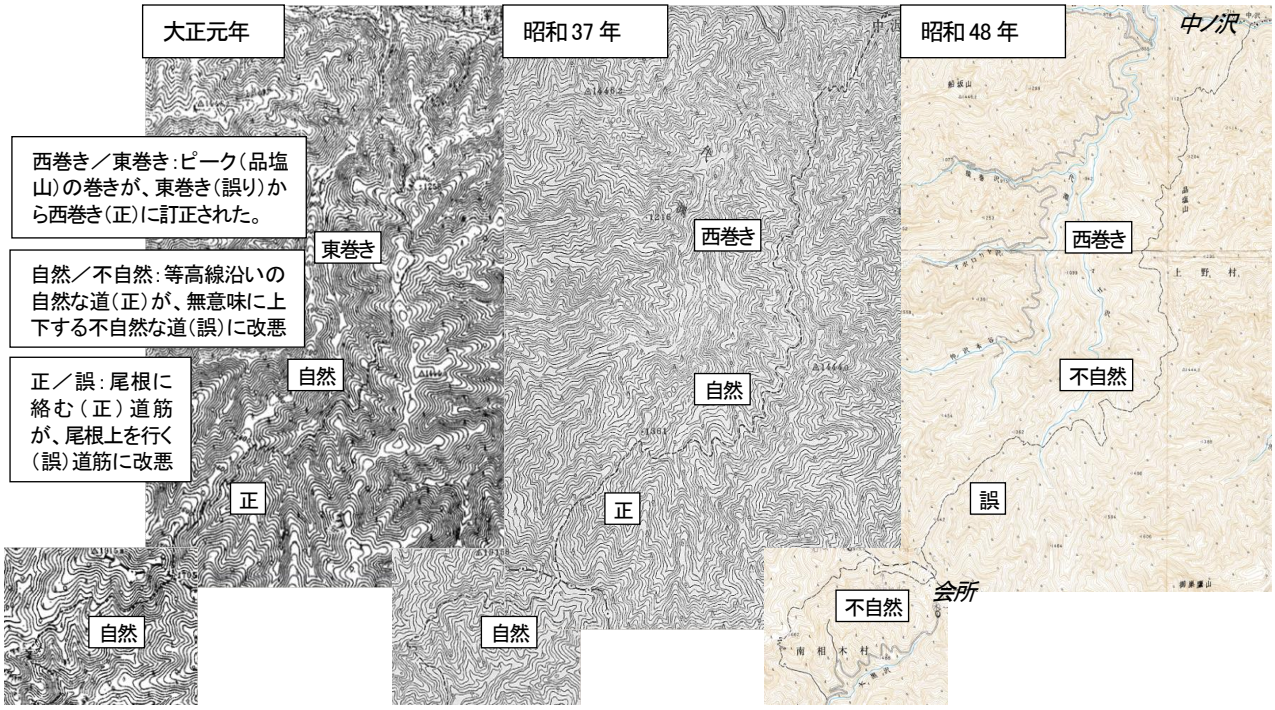
峠道の経路を考えるに当たり、始めに地図に示された道筋を確認しておきたい。地形図に見る道筋は改版により五回の変化が認められ、中でも車道開通等の外的要因とは関係なしに、明らかな理由もなく昭和37、48年の二度に渡り道の位置が変更されていることに注目したい。順を追って見ていこう。

初期の経路は大正元年測図（同３年刊行）～昭和27年応急修正（同年刊行）の５万分１地形図「十石峠」にあるもので、道筋を比較的良く再現していた。測図当時は、約三十年前まで馬が通っていた位なので、道を良く知る村人がおり、道もまだ何とか歩ける程度だったためかも知れない。ただ一ヶ所、品塩山の南で1330m圏峰を東から巻くようになっているが、この点は間違いと思われ、現地の地形を見れば、あり得ない経路であることが理解できるだろう。わざわざ一度稜線を乗越し、岩場と崖が続く1330m圏峰の北から北東に掛けて急登してまで馬道を通す理由が全く見当たらず、技術的にも困難なことだ。

地形細部の誤りが多かった初回測量の地形図は、恐らく航空測量の成果であろう、昭和37年修正（同41年刊行）、44年資料修正（45年刊行）で地形がより正確になった。峠道の経路も、実際の馬道らしき痕跡にある程度近い位置に変わり、1330m圏峰を東巻きする図上の誤った経路は、殆んど無駄な上り下りの無い西巻きに修正された。不思議なのは廃道化して約八十年が経過した時点で、道の位置がより正確になったことである。高崎営林署が中ノ沢流域の開発を視野に入れていた時期と重なるので、先行して古い峠道が再建が行われ、それに伴い正しい経路が明らかになった可能性もある。なお 37 年の修正時に会所の1705m独立標高点が廃止され、44年の修正では三川に沿う部分（大黒沢出合の約 200m下流まで）が新造された車道に置き換えられた。 次の変化は昭和 48 年測量（51 年刊行）2万 5 千分の一地形図「浜平」の時に発生した。この変化は峠道に関しては全くの改悪であり、地形表現がより精緻化したにも関わらず、道は多少だがおかしな位置にずらされてしまった。地形図が示す道筋は、品塩山からブンキガ小屋ノ頭に掛けて崖混じりの尾根直下をトラバースし、続いて釜ヶ沢へと不規則で無駄な上下を交えつつ下り、板小屋日向の尾根筋近くを登り、会所を越えると石仏ノ頭の山頂下まで巻きながら登り、茶屋ノ平へと下っている。釜ヶ沢渡沢点と会所の位置だけは極めて正確であり、厳密な鞍部ではなくほんの僅か石仏ノ頭側に登った緩い斜面にある峠道の通過点が正確に描き出されている。この状況では、尾根乗越と渡沢点のみを確認して、道自体の実査なしに図上に適当な破線を描いた疑いを拭いきれない。この道筋は最新の地形図にも踏襲されているので、廃道となって存在しない道が、しかもかつて存在したのとは違う位置に記入されるという、二重の間違いである。平成 26 年調整の図では、ヌクイノ窪が埋め立てられ車道が付け替えられた部分が改修がされた。

ところで道の位置を知る手掛かりとしては、精度の良い昭和37年修正の地形図の他、昭和53年の国有林図が利用できる。浜平から井戸沢を登り、品塩山を経て 1330m圏峰の南で峠道に合するブンキガ小屋ノ頭付近までは、峠道ではなく単なる国有林作業道を示しているので参考にならないが、その先、特に板小屋日向を登る部分は峠道がかなり正確に描き出されている。石仏ノ頭の南を巻く部分では道が消滅しているが、茶屋ノ平の少し下から再び道が現れることが分かる。つまり昭和 37 年修正の地形図と昭和 53 年を眺めれば、経路を一定範囲まで絞り込む事ができるのである。

（続く）



行ってきました

お富士さん

平野　彰

今回は北野代表の計画で新宿周辺の富士塚めぐりをおこなうことになった。

当初は10月14日の予定であったが雨天のため本日28日に変更したものの、台風22号が関東へ接近中で、昨日の青空から一転、雨になりそうな空模様だ。集合場所の JR 千駄ヶ谷駅前には順次 北野、渡辺、大西、今井、片野の各会員が集合。総勢6名は定刻の10時に駅前を出発する。オリンピックに向けて建設中の国立競技場を横目に、本日1番目の鳩森八幡宮神社の富士塚へ向かった。石造りの大鳥居をくぐると今日は縁日で屋台店が数軒開店の準備中。その間を抜け境内の奥に進むと左手に、千駄ヶ谷の富士塚がたたずんでいた。此の富士塚は寛政元年(1789)築造といわれ、都内に現存するものでは最も古く、築造当時の基本様式をよく残している。江戸市中で庶民の間で広く信仰されていて富士信仰のあり方を理解するうえで貴重な資料とのこと。東京都指定有形民俗文化財でもある。麓にはこの塚を築くために土を採掘した後が、池として活用。まずは登山開始、中央の橋を渡るとすぐに「参明藤開山」と刻まれた石碑がある。これは長谷川角行が唱えた題目「明藤開山」を富士講中ガ建てたものという。自然石で造られた階段を5合目まで行くと「小御嶽石尊大権現」の碑や烏帽子岩などもある。比高約6メートルの頂上には立派な奥宮*(写真)*が祀られ、富士山から運んだという黒ボク（富士山の熔岩)が配され金明水、銀明水もある。その手前には、富士講の指導者「食行身禄(じきぎょうみろく)」の石像等々本物の富士山にあるものだ。

ここをあとにして、国立能楽堂を通り、新宿御苑千駄ヶ谷駅口から入園、大木戸口を出て、本日2番目である東大久保富士塚のある西向天神に向かった。

梅鉢の紋が社殿のあちこちにあり由緒ある神社かと思われるが、小雨の中で、境内には我々だけだ。富士塚は8メートルほどの高さで、神社側の銀杏の実は、誰に拾われることもなく独特の匂いを発していた。登山口には浅間神社と刻まれた石碑があり、ブロック塀の下に胎内もある、入口は黒ボクで飾られ奥は1m ほどか。登り口はゴツゴツした道だが、頂上の立派な石碑の周りにも黒ボクが配されている。ここにも登山道、中ほどに「小御岳石尊大権現」と刻まれた石碑が立っていた。頂上からは反対側の道を下り車道に出、東大久保富士塚をあとにした。12時前ではあったが、近くの文化センターで昼食とした。きれいな建物で銀杏の匂いが気になるところだが、休憩も兼ねそれぞれ好みの食事となった。

次の3番目は新宿歌舞伎町2丁目の稲荷鬼王神社内の西大久保富士である。神社の名に「鬼王」と付くのは珍しいが、その名に因み、節分の時は『福は内、鬼は内』と唱えるとか。
鳥居の内側、すぐ左側に鬼の頭の上に載せた1メートルほどの水鉢があり新宿区指定の有形文化財で、元の持ち主が夜な夜な水の音がするのを怪しみ、刀で切りつけたとのこと傍らにはその切られた石が置いてあった。拝殿右手の天水琴があり、風雅な音色を奏でている。

拝殿の左側が富士塚である。神社後ろの道路側がこの塚の入り口で鳥居をくぐって右手が1合目から4合目となる。左側が5合目からとなる、2 メートルほど高さの割には頂上の祠が目立つ。この富士塚は、昭和 5 年に築造されたが、戦後の道路拡張で移動、縮小されたとか。次が新宿 5 丁目にあり、新宿の総鎮守花園神社へと。朱塗りの大きな社殿で幅広い信仰を集めている、また芸能浅間神社とも呼ばれ、芸能関係者の信仰も篤い。酉の市の準備なのか作業員が忙しそうだ。

末社の「威徳稲荷神社」の奥に本日 4 番目の「新宿富士」がある。鳥居のトンネルをくぐるとその奥に神社と塚がある。塚の後ろ側三方は塀で囲まれ、手前には神社があるため、高さ 1.5 メートルの塚は神社の両脇からわずかに見える程度であった。頂上には石の祠がまつられ、塀がない時の写真には金精様も写っている。表面「威徳稲荷大明神」の扁額の後ろにも木製の金精様がまつられ、子授け、縁結びなどのご利益があるとか。鳥居の間を抜けて 5 番目の成子富士をめざす。丸の内線新宿 3 丁目駅から乗車、西新宿駅下車。青梅街道に面した幅の広い長い参道の両側には七福神の石像が並び、その奥が成子天神社だ。そこを左に入ると目指す成子(鳴子)富士である。大正9年の築造で、区内では最後で最大規模の塚だそうだ、高さは 12 メートル、登山道途中に老人、子供などの登頂禁止の札があるものの、危険な箇所には鎖の柵も設けられている。平らな石が敷かれている頂上は比較的広く、石の祠が祀られ大きな賽銭箱も置いてあった。全員での記念撮影後下山*(写真)* 麓北側には富士山の祭神である「木花咲耶姫命」の等身大の石像が立ち、その奥に浅間神社がある。

西新宿駅に戻り大江戸線中井駅下車。道迷いがなければ 15 分ほどの距離で「上落合富士」のある月見岡八幡神社に着く。八幡太郎義家に縁(ゆかり)の神社とか。金ピカの三つ巴の紋が両側に付く門を入ると表面が月見岡八幡神社で、社殿の右側に富士塚がある。登山口右には、子供を抱いた猿、登山道の左に烏天狗の石像がある。高さ 4 メートルの頂上には木造の奥宮が祀られていた。中腹に大小2体の天狗像もある。

これで本日予定の 6 つの富士塚めぐりが完了した。神社参拝後中井駅にもどる。

尚富士信仰、塚築造、富士講など詳細については紙面の都合で次の機会にしたい。打ち上げ予定の高田馬場駅に着くと雨は本降りに、近くの居酒屋で本日の成功を祝って乾杯となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

廃れの系譜⑤　**廃鉱 Ⅱ**

小串鉱山の硫黄

近藤善則

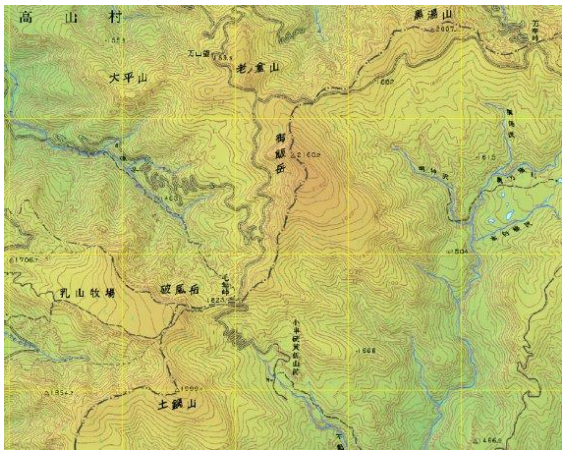
前回、スペースの関係で中途半端に稿を終えてしまい、続きをHPにと思っていたが、更新できないまま再び本欄で駄文をしたためることをお許しねがいたい。
石英と硫黄のことは後回しとして、今回は小串鉱山跡のことを記しておきたい。

毛無峠の硫黄鉱山跡

群馬県嬬恋村と長野県高山村の上信国境・毛無峠(1823m)は、かつて硫黄鉱山とその関連施設の要所であった。この峠の南東

側(群馬県嬬恋村)は採掘主体の坑道やそこで働く人びとの住居などが密集した街を形成し、北西側(長野県高山村)は、採掘した硫黄を精錬する施設があった。小串という鉱山の街は南東側、標高 1500m付近に、最盛期 2000 人もの関係者が生活していたところである。

北東から南西を走る国境の稜線は、中央分水嶺であり、北西側は信濃川水系松川の支流樋沢川-湯沢、南西側は利根川水系吾妻川の支流万座川-不動沢川　という位置関係で、周囲には土鍋山(1994m)、破風岳(1999m)、御飯岳(2160m)など登山でも馴染みのある山々がある。



20 数年前になるか・・・破風岳登山の折、山頂から見ても異様な景色が広がる嬬恋側の荒涼とした風景がなぜか心を捉えて離さないので、思い切って近づいてみることにする。峠からジグザクな道路を俯瞰しながら、慎重にジムニーで下っていった。草木のない赤茶けた谷間にところどころ人工的な遺構が点在し、まさに廃墟を探索している状況にドキドキしながら周囲を見渡すのだった。

なんとなく、街の中心部だったところのような場所に崩れかけた家が埋もれていた。看板には「小串会館」とある。この時の様子を、小生の山の記録に次のように書いていたので、一部を掲載する。

・・・・・

小串会館横に小川が流れている

川床はみな赤い。強い酸性の赤い水が不動沢となり、吾妻川に注ぐ

小串会館はここの労働者の憩いの場であったのだろう

一階が埋もれかけ、壊れたイスやテーブルが死骸のようにころがっている

古い形の電話器が、かつての華やかな頃を連想させるが、今は全くの廃墟と云って良い。

動く物の無い不気味さを感じながら再び毛無峠へ戻る　・・・・・

小串会館跡(1996/7/2 撮影)　今は跡形もない

小串鉱山は、はじめ大正 5 年(1916)に大日本硫黄・高井鉱山として長野側に発したが、嬬恋側に大きな鉱床が見つかり、北海道硫黄・小串鉱業所として発展、昭和 46 年(1971)廃山まで、戦争と共に発展し、大きな地すべりや不況とともに消え去ったところ。

この街の歴史やそこに暮らす人びとの生活にも興味があるが、私としては分水嶺を挟んで同じ事業所が起こした水に関する問題に興味がある。

掻い摘んで記すと———

硫黄は鉱石を採取したのち精錬という作業がある。純度の高い硫黄を分離するためである。分離した後、精錬カスが捨てられる。この精錬カス(澱オリ)が雨などで溶け出し廃水は当然ながら川に流れる。つまり長野側の湯沢から松川に流れるのである。次第に下流域の住民に健康被害がみつかり、原因は硫黄精錬の為と判る。いわゆる鉱毒問題が表ざたになってくる。この対策として、澱を群馬県側に流すことが決められ、小串隧道なるものができあがる。下流の住民の充分な周知が無いまま、魚の住めない吾妻川がさらに上乗せされる。今もなお、うやむやな問題として廃鉱と共に謎として残っているのである。（参考:大野俊「赤い川」1986 第三書館）

廃墟となった鉱山施設(1996/7/2 撮影)

トンネルの出口からいまなお、水が滴り落ちているのを見ると、いまだに　この川(不動沢)の水質はどうなんだろうと気になってくる。、

映画 「記憶～雲上のまち小串鉱山～」

そんな中、今ある記録映画が公開されようとしている。
数年前からサイトの情報で撮影が進んでいると知らされていたが、いつ映画として公開されるのか？どんな内容になるのか？とんと情報が得られなかったが、最近ようやく公開予定が 2018 年夏とわかった。
サイトには 「小串の過去、現在、そして未来・・・ありのままの風景とそこに暮らした方々の記録　新感覚な風景とドキュメンタリーの遺構探訪映画　」 とあり 「ドラマや記録を見せるものではありません」 とのことらしい。
興味を持った方はサイトを覗いてみてほしい。
(上記タイトルで検索し、スタジオまりりんの公式 HP へ)

再生へのとりくみ　　精錬カスの強い酸性土は、植物の生育にも影響を及ぼし、この一帯の荒涼とした景　観を生んだ。

ここでは緑を取り戻すための基礎実験が地道に続けられている。このとりくみが成功して緑豊かな景観が戻ってくることを願いつつ、一方で廃鉱遺産を残すための取組も同時に願うのである。

AGC レポート　vol-60　2017 年 12 月 5 日発行
発行:日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当:近藤　　E-mail:yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp